

ひこしま

歴史回廊

第10部・厳島の文化⑧

桜の季節になると宮島は、遠来の観光客だけでなく近郊からの行楽客でにぎわう。

「肇ふもと谷々かけて咲き匂ふ花は宮島宮島は花」。春の観光のキッチフレーズになりそうなこの歌が詠まれたのは文政元（一八一八）年、二百年近く前のことである。

■花を求め人々散策

文政期の宮島には、「厳島図会」に描かれた大元のほかにも、花の名所がいくつもあつた。「藝徳通志」（一八二六年）では数百株の桜樹が計画的に植えられた中間谷、鳥居松あたりが最盛勝地とされるが、神力寺辺から長浜あたり、四宮神社や南谷、そして弥山も、花を愛で花を求めて王朝人よろしく桜狩を楽しむ人々にとって格好の散策の

地であった。現在の花の名所の原形はそのころまでにはきあがつていたとみてよからうであろう。

長沢蘆が厳島を訪れた寛政の終わりごろから、広島城下の文化は隆盛期を迎える。城下の経済を支えた人々は、豊かな経済力を背景に文化の担い手としても力を蓄えていた。蘆書と交流があつた福屋の六代目、九左衛門忠昌もその一人である。当時有名であつた京の澄月を師と仰ぎ、本格的に和歌を学んだ。

■舞臺の時期に滞在

若いころから石風呂をよく利用していた忠昌は、文政元年、桃花の舞臺の時期に合わせて宮島を訪れた。二週間ほどの滞在中、行く先で詠んだ歌や句をもとに歌文集を仕立て、「花見の記」とタイトルをつけた。冒頭の歌はその小品におさめられた一首である。

城下に伝わつた文芸資料のなかに、厳島を詠んだ作品がいくつもある。厳島を創作の対象としてとらえる城下の人々のまなざしは、聖と俗を併せ持つ江戸時代の宮島の姿をかいまみせてくれる。ひっそりと地域に伝わる文芸資料を掘り起こし、読み解いていくことで、いまだ知られない宮島の姿が立ちあられわれてくるかもしれない。

（県立広島大教授・西本響子）

「厳島の文化」は今回で終わります。来週からは第11部「種生物怪録の世界」を掲載します。

土曜日に掲載します！



瀧開の桜が描かれている大元神社の周辺（「厳島図会」）

桜狩 歌や句 創作の対象に